

‘お’ κόσμος, αλλοίωσις ο βίος, υπόληψις.’

83号 1994. 5. 4
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: V A I 1994. 4. 2 渋谷公会堂 4. 3 NHKホール



芥川龍之介の「蜘蛛の糸」にてでくるカンダタは、もしあのまま蜘蛛の糸が切れず、極楽にのぼることができたらどうなっていたらうか。

スティヴ・ヴァイのギターを聴いていると、ギターの音がああ蜘蛛の糸のように目の前に降りてきて、地獄の血の池で苦しんでいる煩惱でいっぱいの方はその糸をするするのぼって、ついには極楽にたどりついたのである。

極楽はあまりにもなめらかで、やわらかで、あたたかく、あかるい。悲しみも苦しきも悩みもない。けっして枯れることも散ることもない色とりどりの花々が咲き、色とりどりの小鳥たちが澄んだ鳴き声をきかせている。私はお釈迦様の大きくてゆたかな腕のなかで、ぼうっとなつて、そのうちうつらうつらとまどろむ。邪なものはなにもない。心に影をさすものなにもない。

お釈迦様がなにを考えているのか、なにを思っているのか、私にはなにもわからない。ただただ気持ちがゆったりなめらかになって、ねむくなってくる……。

あ、極楽の永遠というところはねむいとところなのかもしれない……。すると煩惱がチラチラわいてくる。「ちょっと退屈。血の池の中のほうがいいかな？」と。

お釈迦様はそんなことはすべてお見通し。スティヴ・ヴァイは最後の曲のギター・ソロで、また蜘蛛の糸でするするとゆっくり私を極楽から下へ降りしていったのである。けれども降ろされたところとはまた地獄の血の池ではなくて、現世であった。2回のアンコールでそれははっきりと感じた。スティヴ・ヴァイは、私を地獄の血の池からひきあげ、極楽を見せ、そして現世＝現実にもどしたのである。それはお釈迦様のたいなる慈悲といえるようなものだったかもしれない。

CDにくらべるとバンド色が強いのが「ライブ！」という感じがしてとてもよかった。ギターの音色もステージでの動きもなめらかな曲線を感じさせ、長髪でひらひらする衣裳の、女性的とすらいえるような（だからインド＝釈迦を想起させられたらう）スティヴ・ヴァイのとなり、モヒカンで上半身はだかにスウェット・パンツというデヴィン・タウンゼントが男性的で直線という感じでゴリゴリにハード・コアのヴォーカル＝ギターをやっている、キーボード、ベース、ドラムは動きも演奏もしっかりと固定、安定しているというバランスのよさはすばらしかった。

定期的に始まり、アンコールも、2、3分ずつ出てくるというところが好感がもてた。

LIVE: 吟遊詩人 1994. 3. 11 渋谷ラ・ママ 3. 15 吉祥寺曼荼羅 4. 24 代々木公園B地区ステージ

ヴォーカル＝アコースティック・ギター、ヴォーカル＝エレキ・ギター（ベースも弾く）、アコーディオン（キーボードも弾く）、ベース（キーボードも弾く）、ドラムの5人編成。3月11日にはじめてライブを見て（この日はドラムがなく4人編成でやった）、とても楽しかったので3月15日、4月24日とライブに行った。ライブハウスもちろんいいけれど、4月24日のような明るい野外でのライブもなかなかよくて「吟遊詩人」というバンド名がぴったり。

吟遊詩人には、ずうっと前にどこかで聴いたことがあるような懐かしさがある。それはけっして古臭いとか、なにかの真似をしているということではなくて、吟遊詩人の歌を聴くと、だれもが「こんなふう感じたことがある」ということを思い起こすからだ。

わかりやすくユーモアとベースに満ちた歌詞が、きれいに澄んだやさしい歌声と親しみのある静かで美しく透明感のある演奏によって、聴く者の心に深くしみいってきて心が洗われる。大きな音を出したり、叫んだりするだけがパワーなんじゃないと思わされた。アコースティック・ギターとエレキ・ギターのどちらもがそれぞれの音色を生かしきっているし、キーボードもアコーディオンも要所要所でじゅうぶんに生かしきっている。どこにでもあるようで、じつはぜったい吟遊詩人にしかないというすてきな音楽である。

「吟遊詩人＝中世フランスの抒情詩人の一派で、各地を旅行し、自作の詩を吟誦・朗読したもの」（広辞苑より）



日の暮る国

月の光

いろいろなやつがいる ほんといろんなやつがいる だけど考えてはわりと同じだったりする いろんなことおきる ほんといろんなことおきる だけどほんのささいな発端はけっとう似かよってたりする いろんなものがある ほんといろんなものがある だけどほんに必要なのは少なかったりする いろんな夢がある ほんといろんな夢がある だけどいったんあきらめちまえば みんな同じ墓にはいる きのう考えたことをまた今日も考えてるぞ おまえについた悪癖が今日も僕につきまざる いろんな歌がはやる ほんといろんな歌がはやる だけど歌い手がちがうだけのシノトラだったりする いろんな歌がある ほんといろんな歌がある だけどおいらの悪い出だけが空回りしてるぞ えらそなやつがいる そして謙遜なやつもいる おたがいやってることはけっとう複雑だったりする 金持ちなやつがいる そして貧乏なやつもいる おたがい新柄つけなげに女に愛を信じてる いろんなやつがいる ほんといろんなやつがいる だけど考えてはわりと同じだったりする いろんなやつがいる ほんといろんなやつがいる だけど考えてはわりと同じだったりする そんな日本だったりする ことは日本だったりする ことは日本だったりする

月の光が世界を照らす 僕らが生まれるずうっと前から 僕らが終るこの道のうさ 今夜もやさしく語りかける 今日君はとても笑ってたね 笑ってる君が好きだから 明日も笑顔で会いたいね だから今夜はもうおやすみ 月の光が世界を照らす 二人がこんなに離れていても 夜空を見上げりゃ同じ月が 今夜もやさしく語りかける 今日君は一人旅してたね しみさと悲しさに我慢できなくて 明日になればききと忘れよう だから今夜はもうおやすみ 月の光が世界を照らす 人々が争いつつ付けていても 明日も君はとても笑ってたね 今夜もやさしく語りかける 今日君は一人旅してたね あることないこといろんなこと ほんといつても日はまた昇るから だから今夜はもうおやすみ 月の光が世界を照らす 僕が来た人ももういなくなった人も 土に帰ればなにも変わらなく 今夜もやさしく語りかける 今日君はとてもおかあいき だから今夜はもうおやすみ だから今夜はもうおやすみ

とってもありがとう

耳をすませばいつでも聞こえる ともとも不思議であったかいみんなの手拍子 耳をすませばいつでも聞こえる ともとも不思議であったかいみんなの手拍子 耳をすませばいつでも聞こえる ともとも不思議であったかいみんなの手拍子 耳をすませばいつでも聞こえる ともとも不思議であったかいみんなの手拍子

インドとギリシヤ

猫と新聞屋

俺は猫に新聞紙をかけてやった 直まみれの猫にかけてやった 雨にぬれた朝の日暮る駅前 さらわたの飛び出た猫にかけてやった ほんの15分くらい俺はやつにつかあった 新聞配達俺は仕事を忘れてやつにつかあったのさ つきあったのさ 俺は早起きじじいのお家へ 毎朝5時半には起きてるじじいさ 俺がそこにとどろくと家の定 じじいは家の前で俺を待っていた おいこらどういうつもりだ 15分も遅れやがって なんとか言えよ新聞屋 冗談じゃねえぞこっちは金払ってんだぜ 俺は猫のようにくらくえし すいませんすいません顔をさげるだけ ちがっちゃ買っ手とを並べるはずの口が 専断したみたいだぶらえてた そうさ俺は新聞屋してあいつは猫つらいも苦しいも言えない 金が欲しくて俺はここに居るのさ 俺は新聞屋してあいつは猫 さらわたの飛び出た猫にきく猫 あれじゃ三味線にもなりやねえ 俺は俺にさせなれやねえのか その皮をばさってやる 厚い皮をばさってやる いつかきつとばさってやる ばさってやる

乾いてかいたギリシヤ、砂漠をなす一つの島のようにきざして いるギリシヤ、都市と都市との、家と家との、人と人とのあらしが、この国では人間の感情を世界中でもっとも明白にし、もっともとらえやすくしている。——一方インドは、濡つてやわらかく、とらえどころがなく、処女林の魅惑を秘めている。われわれはまず、おなじようにひそやかに連続した、一つのメロディーに魅せられる。そのメロディーは、すべての人間を、おなじ愛撫のなかにつつみ、植物から人間への推移の段階を感じられなく、普通のな生命が、一刻一刻、各自の存在のなかに、鏡にうつるように反映するといった感じをおこさせる。インドへ行つたあつたあつたヨーロッパ人のなかで、ただひとり、ボンゼルスだけが、それをきいて表現に移すことができたあのメロディー、狂溢する植物と動物との音、色、匂をわれわれの内通させるあの愛情の感染力は、誰もか浸透されずにはいられない。寺院、洞窟の壁画、宮殿は、その荘厳であたたかさを溶かしこんでしまふ。人は豊潤と柔和と大海におおられるのを感じ、しかしやがてわれにかえると、もっと男らしい、もっと毅然とした調子をなつかしく思うにいたる。そのようにさしだされたやわらかい手の代わりに、がっしりしたにぎりこぶしが見たくなる。インドはそのような男性の成熟を知らなかつた。われわれの目に、インドは永遠の小児の姿をとる。インドの性は女性だが、男性にたとえていえば、この国は、男性の境界まで達したことがなかつたといえよう。

しかし、それがなんであらう？ われわれの国にあっては、サムソンとか、プロメテウスとか、ミテランジェロの奴隷たちとか、ツアラトクストラとかを十分にもつた。反抗や英雄主義は、人間にひらかれた唯一の道ではないのである。

——ジャン・グルニエ「想像のインド」より

photo by K.K.